

教育研究創発国際研修における学術活動報告書

令和 3 年 3 月 19 日

氏名 李 愛慶

所属 学校開発政策 コース

学籍番号 23-207050

指導教員名 勝野 正章

1. 研究課題 “The conflicts of religious teachers at Japanese Christian school”

2. 報告する学術活動の実施期間 令和 2 年 2 月 15 日 ~ 令和 2 年 2 月 16 日

3. 日本学術振興会特別研究員 (DC) の現在の採用状況 DC1 DC2 採用無し

4. 学術活動

国外 国内

①英語論文公表

②研究科教員の研究プロジェクト参加

③フィールドワーク

④国際会議 (研究発表 運営補助 出席のみ)

⑤研究会 (研究発表 運営補助 出席のみ)

⑥研究指導委託

⑦留学

⑧国際研修

⑨国際インターンシップ

⑩その他 (具体的に:)

5. 学術活動実施の概要

※上記4で選択した学術活動について具体的に記載してください。括弧内の概要を必ず記載してください。

- ① 英語論文公表
(著者、発表論文名、掲載誌名等、発表年月巻号、発表年月日等、論文内容の概要)
- ② 研究科教員の研究プロジェクト参加
(プロジェクト名、代表研究者名、自身の具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度、プロジェクトの概要)
- ③ フィールドワーク
(調査先機関等、国名・都市名、具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度、調査先の概要)
- ④ 国際会議
(研究発表・運営補助・出席のみ の別、学会・会議名、国名・都市名、発表題目名、発表形式(口頭・ポスター等)、発表年月日、発表内容等の概要)
- ⑤ 研究会
(研究発表・運営補助・出席のみ の別、研究会名、国名・都市名、発表題目名、発表形式(口頭・ポスター等)、発表年月日、発表内容等の概要)
- ⑥ 研究指導委託
(派遣先機関、国名・都市名、受入身分及び研究、研究テーマと受入教員、受入期間(年月日)、具体的な研究活動、研究発表内容等の概要)
- ⑦ 留学
(派遣先機関、国名・都市名、受入身分及び研究科、受入期間(年月日)、具体的な履修状況、研究発表内容等の概要)
- ⑧ 国際研修
(プログラム名、派遣先機関、国・都市名、派遣期間(年月日)、プログラム概要、研究発表内容等の概要)
- ⑨ 国際インターンシップ
(プログラム名、派遣先機関、配属部署、国・都市名、派遣期間(年月日)、具体的な活動、プログラム内容等の概要)
- ⑩ その他(具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度等の概要)

学術活動区分 (①～⑩を記入)	⑧国際研修
<p>【プログラム名】 2020年度「グローバル・リーダー育成、欧州研修プログラム」国際学術交流会</p> <p>【派遣先機関】 ストックホルム大学教育学部・東京大学教育学部教育学研究科(共催)</p> <p>【国・都市名】 スウェーデン・ストックホルム、日本・東京</p> <p>【派遣期間】 2021年2月15日(月)～16日(水)</p> <p>【プログラム概要】 本プログラムは、国際社会における指導的人材の育成を目的とした教育プログラムで、東京大学の学術交流協定校であるストックホルム大学教育学部との共催で実施された。ストックホルム大学での実施が予定されていたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、オンラインでの開催となった。</p> <p>【研究発表内容】 プログラム2日目の国際セミナーにおいて、発表を行った。 題目：“The conflicts of religious teachers at Japanese Christian school” 内容：日本のキリスト教系学校における宗教科教員の葛藤と葛藤対処様式を明らかにした。キリスト教系学校を取り巻く社会・文化的背景と先行研究の整理したのち、宗教科教員10名へのインタビューデータのナラティブ分析を行った。なお本発表は、2019年修士学位論文「キリスト教系学校の研究—宗教科教員の葛藤と対処様式を中心に—」に大幅な加筆・修正を行ったものである。</p>	

- (注) ① 年月日は西暦で記入してください。
 ② 英語論文発表については報告する学術活動において発表又は受理されたもの。
 ③ 上記に記載しきれない場合は、ページを追加しても差し支えありません。
 ④ 複数回の学術研究活動による報告の場合、適宜本ページを追加し、2つ目以降についても必要な内容を網羅してください。

6. 学術活動による成果

※報告する学術活動について、教育分野における国際的リーダー人材の育成とその研究成果を海外に発信することを目的とした教育研究創発国際研修の趣旨に照らし、その成果を具体的に記載してください。学術活動により得られた自身の研究課題につながる成果についてもわかるように記載してください。

※本欄に書ききれない場合、ページを追加しても差し支えありません。

【学術活動による成果】

本発表と質疑応答における議論から3つの研究課題が見出された。

第一に、発表において国際意識調査等を参照し日本の宗教人口や特有の宗教意識に関する整理を行った。この整理を通し日本の宗教意識を相対化して捉えることができた。日本の宗教意識を把握することは、日本のキリスト教系学校の社会・文化的背景を捉える上で必須である。またオーディエンスからはキリスト教信者は極めて少数なのにも関わらず、ミッションスクールの数が信者に比して多いという日本の現象が興味深くうつることが示された。

第二に、なぜ一部のキリスト教系学校は進学校としての性格を保つのか、についてである。この点については、日本におけるキリスト教系学校の歴史の変遷や「伝統」「評判」についての文献研究が求められる。キリスト教系学校の歴史研究は、『カトリック教育学会』、『キリスト教教育研究』における投稿論文や特別活動において研究が蓄積されている。また、女子教育の起こりとしてのキリスト教系学校に関する研究も散見される。さらに、各学校で発行する創立記念誌やこれらを体系的にまとめた文献も参考になる。

第三に、キリスト教系学校はどのような理由で保護者と子から選ばれているのか、についてである。この点については私立受験における親と子の選好についての整理が求められる。キリスト教系学校を選択する親の動機については、特に世俗化が進んだヨーロッパ社会において研究が蓄積されている。また、日本の文脈における、私立小学校受験や私立中学受験の意味や機能についても参照すべきである。小針誠（2009、2015）の「お受験」についての一連の研究がこれにあたる。このように、キリスト教系学校を選択する親の動機については主に海外研究の分析を進め、それと同時に、日本特有のお受験の意味や機能について小針らの研究の渉猟・分析を進める。また、そのうえで日本と海外の事例の比較研究へと発展したく思う。

これまでの研究では、宗教科教員はどのような葛藤を抱えているのか、について焦点を当て研究してきた。本発表の議論で得た日本特有の宗教意識の整理や、キリスト教系学校の役割を歴史的に捉える視点、親と子の選好といったマクロな分析は、宗教科教員が葛藤を感じる背後にある拘束性を捉えることにつながる。これらは広範な分野の文献調査が求められるが、研究発展の上で必須である。博士論文の完成に向けて取り組んでいく。

日本では宗教系学校や宗教教育に関する教育学研究の蓄積が乏しいが、海外との研究交流を行うことは、日本における宗教系学校の機能、宗教科教員の実態を捉えるのに不可欠である。「グローバル・リーダー育成、欧州研修プログラム」国際学術交流会における研究発表と、議論によって、今後の研究発展を見込むことができた。以上の通り、本プログラムにおける研究発表を通し、教育分野における国際的リーダー人材の育成とその研究成果を海外に発信することを目的とする教育研究創発国際研修の趣旨に見合った成果を十分に得ることができた。